

## 報 告

# 赤穂市における地域スポーツ推進に関する取り組みについて ～「大学ゼミ」・「地域スポーツクラブ」・「教育委員会」の協働方式～

An approach to promotion of the sports activities in Ako City

－ A collaboration system among “seminar in a university”, “sports club in a community” and “board of education” －

高田 哲史

**要約：**本稿は、赤穂市の地域スポーツ推進に関する演習・コミュニティアワーⅡでの取り組みについての報告である。本稿の目的は、平成28年3月に改定された「赤穂市スポーツ推進計画」の中で、新たな具体的施策の一つとして掲げられた、赤穂市にある10のスポーツクラブ21の「クラブの運営スタッフの育成」を研究の目標とし、学生とクラブの現運営スタッフ、さらに赤穂市教育委員会スポーツ推進課の三者が協働して、大学ゼミという場で議論し、地域スポーツ推進のために取り組んだ結果を検証し、その成果と課題をまとめることである。

方法と手順は以下の通りである。

1. 三者でシンポジウムを開催し、クラブの実態やクラブの抱えている問題点・課題を確認する。
2. 三者で討論会を持つことで、地域スポーツ推進に対する学生45人の提言を引き出す。
3. 提言の中のいくつかをクラブの現運営スタッフに実践していただく。
4. クラブの現運営スタッフに学生の提言に対する意見をいただき、不足する点を再試行する。
5. クラブの現運営スタッフに目標達成のための4つの提言を再提示する。
6. 今年度の成果と課題を考える。

取り組みの成果と課題は以下の通りである。

1. 三者が一同に集まり議論する場が持てたのは従来にない取り組みで（赤穂方式）、情報交換や活動のモチベーションを高める意味で成果はあった。
2. 学生は地域スポーツが抱えている問題点や課題を知ることができ、議論を重ね、提言をすることで地域スポーツ推進に貢献できることを学んだ。
3. 学生に対する地域の期待が大きく（提言）、大学が地域スポーツ推進に貢献できることが解った。
4. 今後は、学生が地域スポーツ推進活動により参加しやすいゼミのシステム作りが望まれる。

**Key Words：**地域スポーツ、大学ゼミ、スポーツクラブ21、赤穂市教育委員会スポーツ推進課、クラブ自主運営

### 1. 目的と方法

兵庫県赤穂市は、スポーツ基本法に基づく「スポーツ基本計画」に掲げられている「生涯スポーツ社会」の実現を踏まえ、「赤穂市総合計画」及び「赤穂市教育振興基本計画」に示しているスポーツ分野の施策をより具体化するものとして、平成23（2011）年度に「赤穂市スポーツ推進計画」を5カ年計画で策定した。計画策定の趣旨は次の通りである。

市民が明るく豊かな生活を実現するためには、生活の一部にスポーツを取り入れ、生涯にわたって楽しむこと

がこれまでももまして重要になっています。スポーツは「する」だけでなく、「みる」「支える」など、かかわりかたが多様化してきています。また、子どもの心身の発育や発達に必要な体力・運動能力の低下や生活習慣病など健康面への諸問題に対してスポーツのもつ心身両面にわたる効果が期待されています。

こうした中で、市民一人ひとりが目的に応じて、「いつでも、どこでも、いつまでも」スポーツに親しめる生涯スポーツ社会の実現が求められており、この実現のためには、多様化した課題やニーズに対して、積極的に対応するとともに、総合的に取り組む必要があります。

こうしたことから、生涯スポーツ社会とスポーツ先進都市の実現に向けたスポーツ環境の整備を推進するため、赤穂市スポーツ推進計画を策定します。<sup>1)</sup>

2017年2月22日受理  
Tetsushi TAKATA  
関西福祉大学 社会福祉学部

現在5カ年が経過しようとする時、赤穂市はその成果と今後5カ年のよりよい取り組みを推進するために、平成27(2015)年度に「赤穂市スポーツ推進計画検討委員会」(高田哲史委員長、関西福祉大学)を組織し、平成27(2015)年12月7日より平成28(2016)年3月10日まで5回にわたって会議を開き、「赤穂市スポーツ推進計画の見直し」を図ってきた。そして平成28(2016)年度から平成32(2021)年度までの新たな「赤穂市スポーツ推進計画」を策定した。

赤穂市は其中で「多様な参加ができる『する』スポーツの充実を図るために、スポーツクラブ21の育成」を推進計画の一つとして掲げている。その趣旨は次の通りである。

身近な生活圏で気軽にスポーツに親しめる環境として、小学校区ごとに活動しているスポーツクラブ21の円滑な育成を促進します。そのため、これまでのクラブづくりを踏まえ、スポーツを「する」「見る」「支える」といった多様な参加ができるように、基本理念を確立します。また、クラブが活動する拠点の整備や、クラブ運営のためのスタッフの確保、市民に積極的にスポーツクラブに参加してもらうための広報活動を支援します。<sup>2)</sup>

この計画の見直しの中で、赤穂市スポーツ推進の新たな具体的施策として、広報活動の推進とともに掲げられたものが「クラブ運営スタッフの確保・育成」である。そして赤穂市は、関西福祉大学と連携した人材交流により、このクラブ運営スタッフの確保・育成を図る計画を、大学側と合意してたてた。

スポーツクラブ21の運営スタッフの確保・育成活動は、関西福祉大学社会福祉学部スポーツ福祉コースの演習・コミュニティアワーⅡの時間(13:00～14:30)に、関西福祉大学1号館211教室で、赤穂市内にある8つのスポーツクラブ21の運営スタッフの方々を招いて行われた。今年度参加したスポーツクラブ21は、尾崎、城西、塩屋、御崎、原、有年、坂越、赤穂西の8団体である。スポーツクラブ21赤穂、高雄の2団体については聴き取り調査のみの参加だった。

この活動の当初の目標は、「スポーツクラブ21の運営スタッフの確保・育成」で、学生と討論する中で、地域のスポーツ指導者が学生からよりアクティブなアイデアを提言として受け取り、それを地域スポーツ活性化に生かすことであった。

本研究は「新たな運営スタッフの確保」には焦点を当てず、「現運営スタッフの育成」について照準を当て、一連の取り組みを行うことで、「現運営スタッフの育成」という目標を達成するために提言を行い、その目標達成ができたかどうかを検証し、その成果と課題について考察することを目的とする。



図1. 赤穂市の小学校区分  
(『赤穂民報ホームページ』より引用<sup>3)</sup>)

方法・手順は以下の通りである。

- (1) シンポジウムを開催することで、学生、教育委員会スポーツ推進課、スポーツクラブ21の運営スタッフが一同に集まり、クラブの実態や、クラブがかかえている問題点や課題などを報告する。
- (2) 討論会を持つことで、地域スポーツ活性化を推進するための議論をクラブと学生が行い、そこから出てきた提言(アイデア)を学生一人ひとりが提案する。
- (3) 提言の中からいくつかを各クラブに実行していただく。
- (4) さらに目標達成には何が必要か再び考え、活動を再試行する。
- (5) 目標を達成するための提言を再提示する。
- (6) まとめと今後の課題を考える。

## 2. 赤穂市スポーツクラブの実態と課題の把握—シンポジウムの開催—

地域スポーツ推進の新たな具体的な施策として、「スポーツクラブ21の運営スタッフの確保・育成」という

目標を掲げたが、実際に活動目標としたのは、方法・手順でも挙げたように運営スタッフの育成の方であった。その目標を達成するために、2回のシンポジウムを開催した。そこで確認されたスポーツクラブ21の実態と課題は次の通りである。



写真1. シンポジウムの様子

兵庫県では、21世紀に向けて、豊かなスポーツライフを実現し、スポーツを通じたコミュニティづくりを進めるため、平成12(2000)年度から法人県民税の超過課税を財源として、全県下の小学校区に地域スポーツクラブを設置する支援事業を開始した。支援金は実に一つのスポーツクラブに1,300万円と破格であった。赤穂市も、平成14(2002)年度にスポーツクラブ21尾崎と城西が誕生、以後3年間のうちに10の小学校区にスポーツクラブ21が生まれた。

スポーツクラブ21誕生当初は、既存の組織のスポーツ少年団やスポーツ振興会、また自治会、老人会との折り合いで苦慮するクラブもあり、これは赤穂市も例外ではなかった。やっとな活動が一段落すると、今度は次第に支援金の枯渇による財源難の問題が浮上ってきて、さらに近年は高齢化による指導者・運営スタッフ不足が深刻な問題として挙げられてきている。

いわゆるヒト、モノ、カネといったものは有限で、クラブの活動を存続させるためにはクラブ自体の自主運営能力が大いに問われることになるが、赤穂市の場合についても、一部のクラブ以外将来的にスポーツクラブの存続が危惧される状況にあった。

一方、赤穂市は平成23(2011)年11月29日から平成24(2012)年2月17日までに5回の議論(赤穂市スポーツ推進会議:岩間文雄委員長、関西福祉大学)を重ね、平成24(2012)年に「赤穂市スポーツ推進計画」を策定し、

同年2月23日に「健康とスポーツを新機軸としたスポーツ先進都市」の実現を目指して、兵庫県下に先駆け「スポーツ都市」を宣言した。以後数多くの取り組みが行われたが、スポーツクラブ21についてはその活動に課題が残った。

そのような状況の中で5年が経過し、前述の「赤穂市スポーツ推進計画検討委員会」が開催され、赤穂市スポーツ推進計画の見直しがなされた。その際、今回のプロジェクト、つまり大学ゼミとスポーツクラブ21が協働して地域スポーツの活性化を模索する案が出てきた。当初、この取り組みはあくまでスポーツクラブ21の自主運営能力の回復・向上を目指した運営スタッフの育成を大学ゼミの場で行おうと企画したものであった。実際は学生の地域スポーツ学習の場にもなり、スポーツクラブ21にとっても複数のクラブが一同して、クラブの実態と課題をもう一度見直す機会となった。

複数のスポーツクラブと教育委員会スポーツ推進課が大学ゼミの場に一同してシンポジウムを開き、クラブの実態と課題を報告し合うという取り組みは、全国的にみてもめずらしい方式であり、私たちは次に述べる三者が参加した討論会と合わせて、地域スポーツ推進に関する赤穂市独特の取り組みという意味で、「赤穂方式」と呼ぶことにする。

### 3. クラブ指導者と学生の意見交換による地域スポーツ活性化への提言—討論会の成果—

シンポジウムで赤穂市スポーツクラブ21の実態把握と課題の確認をした後、前期に5回、後期に2回、計7回の討論会を大学ゼミ(社会福祉学部スポーツ福祉コース2年)で開催した。この討論会の目的は、クラブの運営スタッフと学生が赤穂市の地域スポーツ活性化を推進



写真2. 討論会の様子1

するために今後の取り組みとして何が必要かを互いに率直に議論することで学生からの提言を引き出すことであった。少し僭越なやり方ではあったが、当初はその提言をもとにスポーツクラブ21の運営スタッフのスポーツクラブ自主運営能力を上げようとするのがねらいであった。

この討論会には、赤穂市教育委員会スポーツ推進課の米口俊也課長や同課の満重義浩スポーツ推進専門員も出席していただき、行政（赤穂市）とスポーツクラブ（一般市民）、大学（学生）の三者が協働して、大学ゼミという場で、地域スポーツ活性化を推進するために議論するという画期的な取り組み（赤穂方式）となった。

当初のねらいとは裏腹に、討論会は最初学生の意欲・知識不足により停滞気味であったが、それでも回を重ねていくごとに次第に活発な議論がなされるようになり、学生たちも段々自分たちの意見を言うことができるようになった。

前期4回の討論会を終え、スポーツ福祉コース45人の学生一人ひとりからの提言をまとめた冊子「赤穂市地域スポーツ活性化への45の提言」を作成、赤穂市教育委員会スポーツ推進課と赤穂市スポーツクラブ21に提示した。この45人の提言の主な内容は次のとおりである。

（数字は同じ意見の人数を示す）

- スポーツだけでなく、地域に合ったいろいろな活動を同時に行い、幅広い年齢層の参加を求める。 17人
- イベントチラシや回覧板、アンケートなど、広報活動に努める。 8人
- その地域だけでなく、複数の地域で合同のスポーツ大会を開く。 7人
- 年齢層に適したスポーツを取り入れる。 5人
- 関西福祉大学で小学生対象のサッカー大会を開く。 3人
- 大学でスポーツクラブ21のつどいを開く。 2人
- 高齢者と子どもの活動を分けて考える。 2人
- 学生が地域のスポーツ活動に参加する。 1人



写真3. 討論会の様子2

#### 4. 提言に対するスポーツクラブ21の意見一聞き取り調査一

「赤穂市地域スポーツ活性化への45の提言」により、その後スポーツクラブ21がどのような取り組みをしているかを調べることもあり筆者は夏期休業中に赤穂市内の10のスポーツクラブ21の会長さん宅を訪問し、聞き取り調査を行った。その結果は予想したこととかなり異なるものであった。

まず、今回の学生の提言で一番多かった、スポーツにこだわらず多種多彩なイベントを同時に開催したらどうかという提言に対して、ほとんどのクラブがスポーツクラブ21の当初の設立趣旨から、やはりスポーツ・運動に関する活動をするにこだわっているということが分かった。

次に、イベントチラシや回覧板、アンケートなど、広報活動に努めるという提案には同調するが、現在でも広報活動には努力しているという回答であった。

学生の提言で3番目に多かった複数の地域が集まり合同のスポーツ大会を開くという提言には、すでにグラウンドゴルフ大会などや、ゲートボール、ペタンク大会など、スポーツクラブ21が近隣の市町村も含めて、年に何回か開催しているとの答えであった。

総じて、学生の提言はスポーツクラブ21の運営スタッフにとっては、すでに実行していることか実行不可能なものであった。

特筆すべきことは、学生の中で少数の提言だった、大学でスポーツクラブ21のつどいを開く、学生が地域のスポーツ活動に参加する、の2つの提言に期待を寄せる回答が複数のクラブから出たことである。このことは「赤穂方式」の当初のねらい、スポーツクラブ21の運営ス

スタッフのスポーツクラブ自主運営能力を上げるというねらいとは少しかけ離れるものであった。クラブの希望は、学生のスポーツクラブ21へのボランティアスタッフとしての参加を期待しているものであった。

## 5. 地域スポーツを理解する取り組み

「赤穂方式」でのスポーツクラブ21の運営スタッフのスポーツクラブ自主運営能力を上げるというねらいは、現実的には現段階ではややうまくいっていないことが判明したが、クラブの会長さんの一部からは、複数のクラブの運営スタッフが大学ゼミの時間に一同に集まって、学生たちと赤穂市の地域スポーツ推進についてお互いに意見を交換する場を持つことができたことは意義があったという意見もいただいた。

各クラブの会長さんからの聞き取り調査から、大学ゼミの中だけでは地域スポーツ推進には十分に貢献できないと考え、筆者と学生は、地域に出て行き、自らの肌で地域スポーツを理解する努力をしなければと感じた。そこで後期に向けて次の3つの活動を計画した。

- (1) 夏期休暇中を利用して、個々の学生が現地に赴き自らスポーツクラブ21を研究する。
- (2) スポーツクラブ21が活動しているスポーツ種目を学生が体験する。
- (3) スポーツクラブ21の活動状況を学生が訪問視察する。

(1)の学生の現地研究はレポートにまとめて後期初めに提出してもらった。学生のほとんどが自分の住居近くのスポーツクラブ21について調査研究をしたが、そこで学習したことは、現地に出かけ、実際に施設などを確認できたこと、人口構成や年齢構成などを調べたことでク

ラブの環境を理解することができたという意見が多くみられた。

(2)の学生のスポーツ体験は、後期ゼミの時間に、クラブの指導者の方々を招いて、グラウンドゴルフとペタンクの2種目行った。自ら活動に参加してみて、ほとんどの学生が、スポーツクラブ21の人々が行っているスポーツの楽しさが理解できたと述べた。

(3)のスポーツクラブ21の活動状況の訪問視察は、大学の大型バスを利用して、後期ゼミの時間に、スポーツクラブ21城西と尾崎の2つのクラブを訪問地に選んだ。それぞれクラブで、施設・用具の説明を受けたり、尾崎ではクラブの活動状況なども視察・体験でき、学生たちはスポーツクラブ21の活動を膚で感じる事ができた。

これら3つの活動で得た体験は、今後地域スポーツ推進に学生が実際に地域の活動に参加する重要性を示唆してくれるものであった。

## 6. スポーツクラブ運営スタッフの育成に必要なもの —触れ合うこと—

スポーツクラブ21の運営スタッフのスポーツクラブ自主運営能力を上げるという取り組み「赤穂方式」は、ただ大学ゼミの時間を中心に学生と運営スタッフがシンポジウムや討論会を開催して議論するだけでは不十分であることが解った。

「赤穂方式」に不足していることは何か、学生に「今後の取り組みとして必要なことは何か」というアンケートをとってみるとあることが判明した。それはスポーツクラブ運営スタッフと地域でのさらなる触れ合いが必要だということである。地域スポーツを理解することがまず必要で、それは地域スポーツクラブの運営スタッフと活



写真4. スポーツクラブ21が利用する地域の施設



写真5. グラウンドゴルフの風景（赤穂市HPより引用<sup>4)</sup>）

動場面で直接触れ合うことによりさらに現実的な取り組みとなると学生は考えた。

後期の授業で取り組んだ学生とスポーツクラブ21の指導者の方々とのグラウンドゴルフやバタンクによる交流、現地を訪問視察することによるスポーツクラブ21の理解といった取り組みがより学生の地域スポーツ理解に繋がり、それが地域スポーツ推進に何らかの寄与をすることに繋がると学生は理解した。

筆者も、平成29(2017)年1月1日元旦にスポーツクラブ21城西が毎年開催している元旦ウォーキングに参加してみて、地域の人々と活動を共有することの大切さを肌で感じた。



写真6. 元旦ウォーキングの様相 (フォーカス操作)

スポーツクラブ21の運営スタッフのクラブ自主運営能力の育成をするためには、運営スタッフの方々だけに期待するのではなく、共に活動を通して触れ合うことにより、運営スタッフの方々の活動に対するモチベーションを高めることが重要であると感じた。

#### 7. 赤穂市と赤穂市スポーツクラブ21への提言

平成26(2016)年12月17日(土曜日)に、関西福祉大学A100教室で開催された「2016演習・コミュニティアワーⅡ発表会」において、スポーツ福祉コースの学生代表は、スポーツクラブ21の方々と赤穂市に対して、赤穂市の地域スポーツ推進に関する取り組みとして4つの提言を挙げている。それらは次の通りである。

- (1) 各年代に合った新しいスポーツを取り入れる。
- (2) スポーツクラブ21の指導者が自ら小学校を訪問し、スポーツを通して子どもたちと触れ合う時間を作り、子どもたちにスポーツに対する興味・関心を芽生えさせる。

(3) 学生が地域スポーツ活性化のサポートをし、イベントの企画に協力する。また、スポーツクラブ21を知ってもらうためのチラシ作成についても協力する。

(4) 赤穂市スポーツクラブ21の人たちを大学に招いて、地域スポーツクラブのつどい(仮称)を学生とともに年に何回か開催する。

(1)以外の提言はすべて学生とスポーツクラブ21の方々との活動を通しての触れ合いの重要性を指摘しているものである。

学生たちが直接スポーツクラブ21を運営するわけではないので、スポーツクラブ21など、地域スポーツ活性化を推進するためには運営スタッフのスポーツクラブ自主運営能力を上げることが大切である。学生が貢献できることは、学生自らが地域の方々と活動を通して触れ合い、協働して地域スポーツ活動を盛り上げていくことで、これらのことがうまくいくと「赤穂方式」は俄然力を発揮する取り組みとなるのではと筆者は考える。

#### 8. 成果と課題

大学ゼミという場で、赤穂市の地域スポーツ推進活動を再考しようとする取り組み「赤穂方式」は、スポーツクラブ21にとっては今まで地域独自で行っていた取り組みを、大学ゼミというサテライトを設けることで、そこに地域スポーツの運営スタッフ、赤穂市教育委員会スポーツ推進課の方々が一同に集まり、相互にクラブの実態を確認したり、問題点や課題を出し合って全赤穂市の活動として地域スポーツ活動を見直そうとすることであった。シンポジウムや討論会で学生たちと議論を重ねることにより、地域スポーツ推進に対する学生たちの新しい提言をクラブの運営スタッフは期待していたが、現実



写真7. 元旦ウォーキングのお疲れさん会

的には学生の提言で成果は思ったほどでなかった。

しかし、スポーツクラブ21の会長さんや運営スタッフの方々の中には、クラブの運営に学生たちの新しい息吹を感じて、地域の大学である関西福祉大学の学生に期待を寄せる声は大きい。

学生の提言で一番多かったスポーツだけでなく、地域に合ったいろいろな活動を同時に行い、幅広い年齢層の参加を求めるというやり方もすでに元旦ウォーキングなどでみられ、今後のクラブ員や運営スタッフの新たな確保にも繋がるものと考えられる。

また、学生にとってこれら一連の取り組みは、赤穂市の地域スポーツが抱えている問題点や課題について学ぶ機会となり、地域スポーツ推進に貢献するという目標達成のために議論を重ねて、そこから出た意見を提言という形で赤穂市や赤穂市スポーツクラブ21の指導者の方々に発信できたという点で大変意義あるものとなった。

今後、大学や学生が地域スポーツ推進活動にさらに貢献するためには、ただ大学の中だけで地域スポーツ推進を考えるのではなく、地域に飛び込み、地域の方々との触れ合い協働することで地域スポーツ推進をいかにすすめていくかを考えていくことが課題であろう。しかし、ただボランティアスタッフとして大学生が地域スポーツ活動に参加するだけというのではなく、地域スポーツ活動推進に貢献できるシステムとは何かということを学生と地域、教育委員会が協働して生み出していくことが必要である。そのシステムが軌道に乗れば、大学ゼミを通しての地域スポーツ推進への取り組み＝「赤穂方式」が真に赤穂市に定着すると筆者は考える。

#### シンポジウム、討論会、聞き取り調査、視察訪問への参加・協力団体

赤穂市教育委員会スポーツ推進課

赤穂市スポーツクラブ21 尾崎

赤穂市スポーツクラブ21 城西

赤穂市スポーツクラブ21 赤穂

赤穂市スポーツクラブ21 高雄

赤穂市スポーツクラブ21 塩屋

赤穂市スポーツクラブ21 御崎

赤穂市スポーツクラブ21 赤穂西

赤穂市スポーツクラブ21 原

赤穂市スポーツクラブ21 有年

赤穂市スポーツクラブ21 坂越

#### 引用資料

<sup>1)</sup> 赤穂市スポーツ推進計画（2016年3月）、赤穂市教育委員会、1頁。

<sup>2)</sup> 赤穂市スポーツ推進計画（2016年3月）、赤穂市教育委員会、20頁。

<sup>3)</sup> 赤穂民報 HP ([www.ako-minpo.jp/](http://www.ako-minpo.jp/))

<sup>4)</sup> 赤穂市 HP ([www.city.ako.lg.jp/](http://www.city.ako.lg.jp/))